フォーカス　奥出雲創生の現在地

奥出雲町が「ホッケータウン」に認定されました

本町は、日本ホッケー協会から「ホッケータウン」の認定を受け、11月4日に三成公園ホッケー場で認定式が行われました。

これは、同協会の設立100周年を記念して行われる事業で、ホッケーを通じた地域活性化を目指す市区町村が認定の対象となっており、19自治体が認定されました。

今回の広報紙では、昭和57年に仁多郡で島根国体（くにびき国体）ホッケー競技が開催することが決定した後、今日までどのようにホッケーの普及、振興に取り組んでこられたか、長年にわたりホッケーに携わる島根県ホッケー協会理事長の児島史朗さん、前島根県ホッケー協会副理事長の小櫻和裕さん、セルリオ島根元監督の安部隆史さん、元さくらジャパンの山本由佳理さんにお話を伺いました。

児島史朗さん

なぜ仁多郡でくにびき国体が開催されたのですか？

昭和48年に、県が各市町村の要望を聞きながら、各競技の開催地を決定しました。当初、第一希望として横田町は山岳競技、仁多町は卓球競技の開催を希望していましたが、一市町村での開催が困難であること等により、開催を断念することになりました。そして、仁多町の第2希望であったホッケー競技を仁多・横田町で開催することで決着がつきました。

小櫻和裕さん

昭和49年に島根県ホッケー協会が発足し、その後、どのようにホッケーが町内に広まったのでしょうか？

誰も見たこともやったこともない競技のため、まず、学校の先生であった私の高校時代の恩師が、昭和53年に天理大学にルール等を学びに行くこととなり、当時、大学で体育を学んでいた私も一緒に行きました。そして、そこで得た知識を広めるために、まず、学校の先生や役場の職員等、町内の若者を中心に練習会を開催しました。今のように戦術もなく、とにかく走って、ひたすらボールを追いかけていましたね。そして、間もなく、学校にクラブや部活が誕生しました。

安部隆史さん

くにびき国体に少年男子として出場され、その後、成年男子として国体に出場された経験をお持ちですが、感想を聞かせてください。

私が中学生の時に富山県で全中（全日本中学校ホッケー選手権大会）が開催され、先生から「行きたい人～」と聞かれて、出場し、ルールを聞きながら競技をしました。翌年の昭和52年に、仁多中でホッケー部ができ、社会人チームであるマツダオート広島の選手等が教えに来てくれていました。そして、高校3年生の時、くにびき国体の少年の部に地元開催枠で出場しました。たくさんの人が応援に来て下さりびっくりした事を覚えています。初戦の対戦相手は、3冠がかかる岩手県のチームでした。1－2で負けましたが、強豪校を相手に先制点を取ったんですよ。

その後、平成4年には成年の部で国体に出場しました。この時は、実力で中国ブロックを優勝し、国体への出場権を得たので、とても印象深い大会です。

児島史朗さん

現在、男子ホッケーは3冠を獲得するほど強くなりました。いつから強豪校に仲間入りをしたのでしょうか？

昭和62年は、地元で開催される全中のため、私が監督をしていた横田中男子ホッケー部は猛練習をしました。走り込みで基礎体力を付け、「止める・パス・ドリブル・シュート」を繰り返し行い基本技術の向上を目指しました。部員の中には、練習がきつくて弁当が食べられない子もいて、ご飯に麦茶をかけてかき込んでましたね。そして、部員はバス通学ですが、練習をしているとバスの時間に間に合わないので、指導者が自宅まで送ってました。猛練習の結果、昭和62年の全中で全国制覇をしました。この時、横田中女子ホッケー部も揃って全国制覇をしています。続いて翌年、昭和63年でも横田中男子ホッケー部は優勝し、連覇を成し遂げました。

そして、この部員が横田高校へ進学し、平成3年にインターハイで初優勝をしました。この頃から、強豪校の仲間入りをしました。

小櫻和裕さん

現在、多くの女子ホッケー選手を輩出していますが、女子が力をつけたきっかけは何ですか？

私は、昭和54年から横田高校女子ホッケー部の監督を29年間していました。初めは、1～2人しか部員がいませんでしたが、徐々に増えていきました。

平成になった頃、私は次第に地域にホッケーを根付かせないといけないと思いはじめ、高校卒業後もホッケーができるよう大学にお願いをして回りました。今のように名が知れていなかったので、門前払いもありましたよ。そして、横田高校女子ホッケー部から1人が天理大学に進学をした事を機に、2年後にも進学をし、全日本に選ばれました。彼女たちは、大学卒業後も地元へ戻り、一緒に練習をしてくれました。こうして、女子も力をつけていき平成6年に国体、平成7年にインターハイで優勝しました。

山本由佳理さん

山本さんは、高校卒業後、ソニーHCに所属され、3回のオリンピックを経験されました。印象に残っている大会、選手引退後の現在の活動や目標を教えてください。

私は大学2年生の時に全日本に加わり、2020年アテネ、北京、ロンドン大会に出場しました。一番思い出深い大会は、8位に入賞したアテネですね。また、オリンピック出場を決めた試合についてもよく覚えています。

現在は、全日本のコーチとして、対戦する相手が何を得意・不得意としているかを分析し、選手をサポートしています。

私がオリンピックに出場して以来、オリンピックには必ず地元出身選手が出場しています。今後、一人でも多く日本代表選手として活躍できる選手を輩出するため、たくさんの小中高校生に自分の経験を伝えていきたいと思います。そして将来オリンピックでメダルをとってくれることを期待します。

児島史朗さん

本町を取り巻くホッケーの課題と目標は何でしょうか？

大会で上位に食い込むようになった頃から、大学でもホッケーをする選手が増えてきました。しかし、卒業後、男子にはセルリオ島根があるとは言えど、働きながら競技を続けられる環境が十分に整っているとは言えません。また、人口減少により、他の競技との選手の取り合いをする時代となりました。このような状況を改善するためにも、ホッケーの面白さをさらにPRし、選手を確保すること、安心して競技と仕事を両立できる環境を整えることが大切です。

私が小学生の頃、当時の仁多郡内の小学校では、すでにホッケーを始める学校がありましたが、私がホッケーを身近に感じる様になったのは、中学に入り、ホッケー部の友人の活躍を観てからだと思います。私は中学生時代は吹奏楽部に所属していましたが、国体前年に開催されたリハーサル大会に参加し、地元選手の活躍、運営や応援など、町民全体が国体を初めて迎える高揚感と国体を成功させようといった気運を今でも鮮明に記憶しています。あれから約40年の間、連綿とその精神は引き継がれ、ホッケーは町民の皆様にそれぞれのドラマと感動を与え、奥出雲町、島根県の代表的なスポーツとなりました。ここまでの事例は全国でもまれであると思いますし、選手、指導者、役員、支える家族として、様々な形でホッケーに携わってこられた全ての皆さんに敬意と感謝を伝えたいと思います。

先般、ホッケータウンの認定を受けました。2030年の国民スポーツ大会にむけて、町としては、Aーカメラの導入などホッケーで全国初の試みも行うなど、環境整備、選手強化を図るとともにホッケーをはじめ、奥出雲町のスポーツ振興を推進していきます。

奥出雲町長　**糸原　保**

何もわからない所からスタートし、多くの方々の努力と情熱により「ホッケーの町」として知られるようになりました。

現在、室外だけでなく、室内ホッケーの道具も整備されており、子どもたちにとって身近なスポーツとなっています。今後も子どもたちのホッケーを通した活躍が期待されます。